Lutèce　大阪市立大学フランス文学会
第21巻　1991　抜刷

『ロランの歌』と「一貫性」の神話

——テクストを巡る諸言説と中世「文学」の他者性——

小栗栖　等

『ロランの歌』と「一貫性」の神話

――テクストを巡る諸言説と中世「文学」の他者性――

小栗栖　等

Ⅰ．中世「文学」

本稿の対象は『ロランの歌』を巡る諸言説であり、目的はそれらに通底する或る前提が如何に根強く中世のテクスト研究という実践において君臨してきたかを示すことである。実のところ、ここでは或る「態度」が問題<problématique>とされている。それは中世のテクストを文学として読もうとする「態度」である。つまり、今回扱われる前提はそうした「態度」をつくりあげる、あるいは逆に「態度」が含意する諸前提の一つに過ぎない。

中世テクストの研究領域においては、こうした「態度」は比較的最近になってようやく明白に問題化した。筆者の知る限り、それは1978年 9月19日のモントリオールでの公開講義をもとに著された、ポール・ズムトールの『中世を語る』においてである[1]。

「《文学》について語ることはかくして、我々の師匠にとっては、育ちの良い知識人が1900年代のパリ、ウィーンにおいて読むことのできるものと、我々の古い詩の本質的な合致(conformité)を宣言することに帰着していた。」

但し、これにはミハイール・バフチーンという例外を考慮せねばならない。1965年に刊行された「フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化」[2]において彼は、従来のラブレー研究が十六世紀から二十世紀にかけて支配的であった西欧ブルジョワ的な文学観に基づいて行われてきたことを指摘しつつ以下のように述べている。

「ラブレーのイメージ群が類を見ないほどに未来に満ち溢れていることは、既に引用した評価のなかでミシュレがかくも正当に強調したのであるが、正にそのイメージ群の、この特殊なそして根源的な民衆的性格 <popular character> こそが、それを説明づける。これは同様にラブレーの《非ー文学的<nonliterary>》本質をも説明付ける。その本質とは、十六世紀に支配的であったし現代においても尚支配的であるような文学の規範と基準に対して、ラブレーのイメージ群がもつ《非ー合致性<nonconformity>》である［……］」

バフチーンとズムトールに一つの共通項を見出すとするならば、「文学」という概念が一つの枠組みを当て嵌め制限を与えようとする「態度」を伴うことを指摘しているという点である。否寧ろ「文学」という概念そのものが、一つの「態度」であると両者は述べている。本稿はそうした「態度」が、実際にどのような形で『ロラン』を巡る諸言説中に現れるかを考察し、その「態度」を問い直すことを目指している。

Ⅱ．「一貫性」について

但し、今回の考察が『ロランの歌』を巡る諸言説の一部に限っておこなわれるにせよ、「文学」という「態度」の全容を限られた紙幅で述べることは不可能である。そこで、そうした「態度」の含意する最重要の一つの前提のみについて論を進めることとする。それには中世のテクストの統一性(unité)、一貫性(cohérence) 及び、必然性(nécessité) という概念が大きく関わっている。ところで、後に明らかになるように、この三つの概念は相互に結びあっており、この三者を一括して「一貫性」と名付けることは許されるであろう。

ここで問題となる一貫性とは如何なるものか、先ずは具体例を検討して見よう。フランシス・クックは1987年に発刊された『「ロランの歌」の意味』において、エーリッヒ・アウエルバッハの『ミメーシス』(1946)の第五章「ロラン

がフランク軍の殿軍に推挙された次第」の一節を援用して、一貫性を説明している[3]。

「ロランが殿を率いるよう指名される場面についての有名な論考のなかでアウエルバッハは問う。何故シャルルマーニュが読み手――この読み手（アウエルバッハ自身）――が期待するようなことをしないのか。何故、彼は軍勢の批准なしに指名を認めるのか。ガヌロンの陰謀について彼はどれほど知っていたのか。彼は何故あれ程怒りながら、それにも拘らず裏切りを阻止できなかったのか。」（括弧内は引用者による）

ここで問題となっているのは、我々の目に論理的、心理的に矛盾すると見える一人の登場人物の複数の行為であり、我々の目には状況にそぐわないと見える登場人物たちの諸行為である。つまり、「一貫性」とは登場人物の言動や行動、その現前、不在が必然的に見えるか否かということに関わっている。これが従来の中世研究家にとって大きな関心事であったと同時に尚もそうであることは、1987年に発行された『「ロランの歌」の意味』において、クックが、「一貫性とイデオロギー」という章を設けていることや、1980年発行の「中世を語る」において、ポール・ズムトールが幾度も「一貫性」について言及していることからも明らかである。しかし、恐らくこの表現は不適当であろう。テクストの「一貫性」は大前提となって、比較的最近、ズムトールによれば1970年代の後半に至るまでは、寧ろ真の意味で問われることのないままに、見逃されてきたのである。その点を、『ロランの歌』に関する幾つかの諸言説を巡って検討して見ることとする。

例えば、二つの詩節（レース）において語られる、殿軍に指名された際のロランの相矛盾して見える態度――第59詩節では、指名者であるガヌロンに感謝の意を表し、続く第60詩節ではこれを罵る――をベディエは、その著書『ロランの歌――注釈』(1927)において、ガヌロンの裏切りを見抜いたロランの意図的な行為であると見做し、その根拠についてこう語る。

「もし彼（ロラン）がロンスヴォーに残れという命令を、普通の命令として受け入れたのであれば、［……］『ロランの歌』はあらゆる存在理由を失う。」[4]（下線は引用者による）

また、従来ガヌロンは君主を裏切った単なる悪人として解釈されるのが普通であったが、アルベール・ジェラードによれば1940年代頃より、ガヌロンもまた気高い騎士であるというふうに解釈する傾向が現れた。1972年に出版された『オックスフォード本「ロラン」の先史と原史』という著書において、ポール・エビシェも同様の見方をとっている[5]。このガヌロンの復権(réhabilitation) について、ロジャー・ペンサムは、その著書『「ロランの歌」の文学的技巧」(1982)において、ガヌロンを気高い騎士であると解釈することは『ロランの歌』に一貫するテーマに反しているとして、次のようにさえ言う。

「詩人が自らの詩の主題を誤解していると言うのか、［……］詩人はリハビリテーション(rehabilitation)を必要とするのか。」[6]（下線引用者）

ベディエの「存在理由」とペンサムの「主題」は本質的に同一のものであると言える。両者は共に、自律したテクストによる、ある「読み」より他の「読み」の排除を前提としているが、如何なる根拠を以てそのようなテクストの「存在理由」なり「主題」なりの存在を主張しえるのかを説明しない。フランシス・クックは1987年に至って、こうした前提を方法論的仮説として新たに基礎付けようとする。彼は自分の研究――「『ロランの歌』の再読」を以下のように規定している。

「『ロランの歌』の読み直しとは、直ちにそれが明らかにならない場合でさえも、ロランの言動が極めて正当であるという仮説を系統だてて適用することを意味している。この英雄中心的な解釈の仮説は、テクストが大部分一貫したものであり、我々の読みを方向付けるような諸事件に関しての情報を提示しているということを仮定している。　［……］　言い換え

れば、本論の『歌』の読み方も従来のものと同様、ある指向性を持つ。［……］　指向性をもつことは何か避け得るような弱点なのではなくて、あらゆる読みに――少なくとも継起的な物語に一貫性<coherence> を求めようとする読み全てに共通の特質である。問題は読みに与えられた指向性の何れがテクストの内容と最も良く合致するかということなのである。」[7]

（下線は引用者による）

即ち、テクストの一貫性とは、テクストの総体が必然性に基づいて一つの意味ー方向<sens>に向けて収斂しており、必ずやテクスト全体を見渡すことのできる中心がある筈だという確信のもとに求められるものなのである。換言すれば、従来の『ロランの歌』解釈は、テクストが謂わばパノプティコン（一望監視システム）の構造をなしており、中心にある監視塔に立つことこそが、即ちテクストを良く理解しえることなのだという信念に基づいていたと言える。無論、クックはそれを飽くまで仮説であると述べている。それ故、「問題は読みに与えられた指向性の何れがテクストの内容と最も良く合致するかということなのである」という彼の言葉は、解釈に対する一つの相対化を施しているように見える。しかし、彼はそう述べると同時に、イーザーの受容理論をW・ダニエル・ウィルソンを介して援用し、作者が想定する読み手と言う意味での「内包された読者<an implied reader>」（フィッシュの表現を借りるならば「学識ある、もしくは、消息通の<informed or at home>」読者）という概念を用いて、『ロランの歌』を中世の文脈で捉えようとする。彼はウイルソンの言葉を引いている。

「『内包されたあるいは意図された読者の作品内での役割の解釈は、（広い意味で）作者が伝えようと意図したものを目指さねばならず、その意図は歴史的状況が条件付けるのである』」[8]

そこに明らかな矛盾の生じることにクックは無頓着である。仮定された一貫性とテクストが合致することと、作者の意図（クックの言う「内包された読

者」は限りなく「作者」に近い）を捉えることが、等価にされており、クックの論法は実は、中世の作品が首尾一貫しており、統一性を持つということを従来通りに前提としてしまっている。彼の言う一貫性とはル・ジャンティのいう必然性となんら変わりはなく、我々の目に事件の継起が不自然に映らないということである。つまりは現代的な一貫性をテクストに当て嵌めることを彼自身辞さないばかりか、それがうまく当てはまりさえすれば、それが作者の意図に最も近いのだとさえ主張する。この点については、今一つクックの言葉を引こう。

「もしそれ（『ロランの歌』が一貫していないこと）を仮定してしまえば、それで最早、我々は一貫性を見出そうとはしなくなってしまうであろう。そして例え一貫性が存在したとしても、それを見なくなるかも知れないのだ。」[9)]

だが、整合性を求めて限りなくテクストに注釈をつければ、如何なる隔たりも埋め尽くされてしまうのではないかという不安を感じないでおれるならば、クックは余りに楽観主義的である。だがそれ以上に楽観的であるのは、クックが中世のテクストにおける必然性＝一貫性と、我々の必然性＝一貫性を同一視していることにほかならない。

それ故、諸「矛盾」を社会制度的に解決するクック(1989)のやり方は、登場人物の心理を際限なく読み込んだベディエ(1927)やル・ジャンティ(1967)、ブラウルト(1978)[10)]、精神分析学を援用したペンサム(1982)[11)] らのやり方と、テクスト外部の言葉でテクスト全体に必然性を与え、テクストを一つのテーマに収斂させようとする点で、本質的に変わらない。彼らの論理には、「中世のテクストに《一貫性》が存在し得たか否か」を決定することの困難への配慮が欠けている。確かに、クックは当時の社会制度や法制度を、ブラウルトはイコノグラフィや聖書とのアナロジーを、ル・ジャンティは十字軍当時の社会的状況に関する歴史的知識を、またペンサムは精神分析学をそれぞれに援用してい

る。しかしながら、クックのやブラウルトの用いるような方法が有効である為には、先ずにはテクストの成立年代・地域が確定されねばならない。しかし諸説は紛々としており、その仮説的成立年代は極めて広い幅を持っている。伝承主義を唱えるラモン・メネンデス・ピダルによれば、『ロランの歌』は 778年のロンスヴォーでの事件の直後にその源流を遡る[12]。オックスフォード本の内容そのものの成立した時期についてさえ、バリガンエピソードを加筆と見做し、それ以外の部分の殆どが未だカロリンガ王朝の記憶の新しい頃に成立したと見做すものもあれば、十字軍の直前頃をその成立年代とするものもある[13]。ところで、九、十、十一世紀は、騎士階級の意味が教会及び民衆にとって大きく変化した時代であり、この間に、騎士階級はノルマン人、サラセン人、ハンガリー人といった外敵からの保護者となり（九世紀後半まで）、ついで、外敵の弱体化の後には無法な掠奪者となり（十世紀半ばまで）、ついには十字軍となる[14]。こうした変化は地方により、その速度、徹底性に差異のあったことは疑いを入れないが、こうした背景の、何処に『ロランの歌』を位置付けようと言うのか。しかも真に重要であるのはそのことではない。上に挙げたような解釈手法を中世のテクストに対して、我々現代人の「一貫性」を以て適用すること自体への無反省こそが問題なのである。

ペンサムの精神分析学的手法について言えば、これはズムトールの言葉を引くのが適切であろう。

「精神分析学の批評的可能性を、［……］取り入れるのは魅力的なことである（そして今日においては必然的であると思われる）。しかし、(経験は余りによくそれを証明するのだが）そうしても何も解決されないのだ。根本的な点についての情報を欠いているが故に。即ち、たとえ仮りに、人間の無意識がおおよそ同一的なやり方で常に機能してきたことを認めるにせよ、歴史は、長期的持続の規模で見れば、意識が無意識と対立しつつ無意識の内に根を降ろす、濁った境界上にある領域、症候の浮かび出る場を移動させて来はしなかったであろうか。」[15]

つまりは、精神分析もなんら普遍的なものではありえない。ベンサムのとった方法も、クックやブラウルト、ル・ジャンティらと同根の問題を抱え持っていると言わねばならない。つまりは、中世のテクストと我々との間の等質性の信仰であり、両者の間にある差異の排除に対する無配慮である。

中世のテクストが「文学」であるか否かの問題が逸早く提起されたのは、ジャン・リシュネの『武勲詩――ジョングルールの叙事詩的技法についての試論』(1955)においてである[16]。無論、それ以前からそれに類した疑念は表明されていた。クックによれば、19世紀後半に活躍したポーラン・パリスやレオン・ゴーティエにとっては、オックスフォード本は「もっと洗練された、しかし失われてしまったオリジナルの貧弱な一コピー」に過ぎなかった。しかしそこでは、その背後により洗練された、即ち、より「文学」的なオリジナルの存在を前提として、現実に残されている写本のなかの「文学」的観点からの不都合が嘆かれているだけで、中世に「文学」が存在したか否かという問題自体は問われぬままである[17]。それは現実に「文学」的な写本が実在したかどうかではなく、「文学」という基準が中世のテクストに適用されうるか否かの問題であり、「普遍的文学」なるものを前提することの正否こそが重要なのである。

例えば、ピエール・ル・ジャンティの以下の条りは、最初から『ロランの歌』が「文学」の名に値することを前提している。

「それ故、ロンスヴォーのドラマ(drame) は人間のドラマであり続ける。それは情感によってつくりだされたものであり、それにおいては、筋立ては登場人物たちの性格によって制御されている。神は姿をみせるにせよ、ドラマの中で何も変えはしない。ただし、登場人物たちを彼ら自身の運命の主にしておくにせよ、神がその全能、善、正義をあらわさないでおくというわけではない。彼は諸事件、諸行為に、ひとつの意味－方向(sens)を与える。というのも、神は自らの崇高なる摂理によって神秘的に、登場人物たちを導くと同時に、これもまた神秘的に、人間たちに或る自由を与えているのであり、その自由によって登場人物を偉大ならしめつ

つ、神の助けから彼らを切り離してしまうということもないからである。それ故、詩人は人間の現実を無視することがないのと同様、福音書の教えに背くこともなかった。この美しい均衡によってこそ、詩人は叙事詩に相応しい諸人物を創出しえたのであり、この詩人なくしてはこうした人物達は普遍的な文学の名に値しなかったであろう。」[18]（下線引用者）

先の結論と結び合わせるならば、ル・ジャンティのいう神は、先のパノプティコンの監視塔に位置しており、それはつまりは「作者」の位置である。畢竟、「普遍的文学」とは、あるテクストが現代的な「一貫性」に合致することに外ならない。パリスやゴーティエはクック達とは全く逆に『ロラン』の「文学性」を否定しているが、「普遍的文学」の信奉という点で同質である。

その点で、伝承詩である武勲詩を近代的な「文学」の基準ではかることが誤りであるというリシュネの論法は極めて新しいものであった。彼は中世のテクストに近代的な「文学」という枠組みをあてがうこと自体を否定している。しかし、彼の論法にも問題のないわけではない。彼の問題提起は「書かれた詩」：近代文学ー「演じられた詩」：中世「文学」という対立図式に基づいているが、武勲詩が伝承詩であるという前提自体が不確実なものだからである。ブラウルトの指摘する通り、オックスフォード本以下の写本が民衆を楽しませた口承詩を直截に写し取ったものであると主張する根拠は何もないのである[19]。

この「文学」という前提そのものが中世研究の領域で本格的に問題化するのは、1980年のポール・ズムトールの「中世を語る」においてであるが、この問題自体が今なお、全面的な取り組みを為されていないことは、フランシス・クックの著作を見ても明らかである。彼は1987年に至っても、就中匿名のテクストに関しては極めて重要である筈の、テクストの主体たる語り手とテクストの創出者たる詩人或いは作者の区別さえしていないからである。

Ⅲ．中世テクストの他者性と今後の中世テクスト研究の展望

最後に従来の諸研究のベクトルのありかを中世テクストの「他者性」との関

聯で述べつつ、今後の研究の展望を概略しておくこととする。だがその前に、問題となる「他者性」そのものを概括しておかねばならない。

上に述べた精神分析学的手法の採用の際の困難、「一貫性」の困難、そして武勲詩の起源問題の解決に関する困難に共通して現れてくるのは、謂わば「事前的なもの」と「事後的なもの」の区別の困難である。「我々がそう見るからテクストがそれに合致する」のか「テクストが我々にそう見ることを強いている」のか、その区別の困難が正に問題となっている[20]。本稿の文脈に沿うならば、従来の諸言説がテクストに見出してきた「一貫性」が「事後的なもの」か「事前的なもの」かを決定し得ないということこそが問題なのである。だが、一層重要であるのは実の所、そうした事態への研究者の無反省であろう。

「唯一の現実的困難は、乗り越え可能であるにせよ、《近代的》批評の諸器具が、現代テクストあるいは、近似的に現代的なテクストについての考察の進行のなかで、一般的に焦点合わせが施されてきたためにその諸器具が間文化的関係の問題を提起しないという事実に起因する。たいていの場合、それらの器具によって為される研究が歴史に関わるのは、歴史の諸側面の一つに下においてであり、現在の深遠さと重厚さを歴史が構成する場合においてのみであって、歴史が他者の現前を引き起こす限りにおいてではない。」[21]

一つの異質な文化を眼前にして行われるべきことは、自文化との同化、即ち差異の排除ではなく、差異のそのものの捕捉である。無論、そうした作業自体が自文化という基盤に基づいてしまうことは避け難い。だが単なる同化を行う時、異質な文化との遭遇は自文化の礼賛に帰してしまう。例えば既に見てきたように、従来の『ロランの歌』解釈は一つのテクストが現代的な「文学」の基準に合致することを前提すると同時に、その合致を証明することを目的としていた[22]。この同語反復の論理がなしたことは、畢竟上のズムトールの文章が指摘する通り、現代の「文学」の「歴史」を創り出すことで、その正統性、即ち正嫡性の神話を育て上げようとするものであったと言える。無論、枠組みを当

て嵌めること自体が不当であったと極め付けることはできない。寧ろ我々が何らかの枠組みなしに対象を把握できないことこそが理解されるべきである。例えば、ズムトールは中世のテクストを、「文学」という枠組みの外で「他者」として捉えようとする。そして常に方法論以前の諸前提を構築しては突き崩すという行為を通じて「他者」との関わりを常に保つことを、快楽として肯定しようとさえしており、常に「実践」を至上の位置に置いている。彼が否定するのは枠組みそのものではなく、枠組みの固定である[23]。一定の枠組みによって、異文化たる中世が固着され、我々の文化との差異を隠蔽されてしまう時に引き起こされるのは、中世文学の真の意味での「歴史性」つまりは「他者性」の排除である[24]。

【註】

1) *Parler du Moyen Age,* Paul Zumthor, Minuit, Paris, 1980, p.32
本稿は一つの前提について、謂わば「年代記的」に語ることを目指している。その為に諸言説の発行年を煩瑣ながら本文中にも記載する。

2) *Rabelais and his world,* Mikhail Bakhtin, translated by Hélène Iswolsky, Indiana University Press, Bloomington, 1984, p.2

3) *The sens of the Song of Roland,* Robert Francis Cook, Cornell University Press, Ithaca and London, 1987, p.181
『ミメーシス』については、邦訳の上巻 106-137を参照。

4) *La Chanson de Roland* (Commentaires)
Joseph Bédier, Piazza, Paris, 1927, [1968], p.151

5) Cf. *Préhistoire et Protohistoire du Roland d'Oxford*
(Paul Aebischer, Romanica, Berne, 1972, pp. 265-268)

6) *Literary Technique in the Chanson de Roland*
Roger Pensom, Droz S.A. Genève, 1982, pp.124-125

7) F. Cook, op.cit. p.142 ／ Putman's, New York, 1950]

8) ibid. p.135, [cited from W. Daniel Wilson, "Readers in Textes",

9) ibid. p.182

10) Cf. *La Chanson de Roland «Connaissance des lettres»*
(Pierre Le Gentil, Hatier, Paris, 1967, pp.123-148) 〔該当箇所は La peinture des caractèresと題された章であるが、これの結論部分は本論中で後に引用されるであろう(cf. note.16)

Cf. *The song of Roland* (Gerard Brault, Pensylvania State Univ. Press, London, 1978)

［殊に、144-155頁のGanelon at Marsile's Courtの部分を参照されたい。そこでは、ガヌロンの裏切りの意図は、サラセン人の後ろ盾を得てフランスに大きな支配権を握ることであったとし、ガヌロンは悪魔に魂を売り払ったのだとブラウルトは結論付けている。そうした想像の根拠は全く以て不明である］

11) Cf. R. Pensom, op.cit. pp.121-161

［該当箇所においてペンサムは、ロランが重度のノイローゼであったという分析をしつつ、『ロラン』を創出した詩人もそう考えていたが、それを否定的に捉えていたとは限らないという主張をなしている。ところで、興味深いのは同じ箇所に「詩人の意図は複数である。批評家は明晰たらんと欲すれば、そのうちの一つに専心せねばならぬ」という言葉が見出されることである。これは既に引用した彼自信の言葉（Cf. note 6）と明らかに矛盾しており、テクストの中心への収斂という前提が如何に根深いものであったかの一つの傍証となる］

12) Cf. *La Chanson de Roland et la Tradition Epique des Francs* (Ramón M. Pidal, traduction française d'I Cluzel, A. et Picard, Paris, 1960)

13) 前者の例としてはエリナー・ウエブスター・ブラトキンが、後者の例としてはマルティン・デ・リケールがいる。ブラトキンは、『神曲』や『聖アレクシス伝』のような数に基づく構造がオックスフォード本の『ロラン』にもあり、バリガン・エピソードとその他の部分の構造の違いから、前者を加筆と見做している。更に、オリヴィエーロランの名を持つ兄弟、従兄弟の記録に関するリタ・ルジューヌの研究成果、詩の中でフランスの領土として描かれている地域が末期のカロリンガ王朝の枢要部分であったこというフェルディナン・ロート、ロベール・フォティエ、エミル・ミロー、ルネ・ルイスらの指摘に従って、バリガン・エピソードを除いた他の部分が1000年頃に成立したと結論付けている。

一方、デ・リケールの方は、『ロラン』の中でサラセン軍の貢ぎ物の中に現れてくるラクダに注目して、『ロラン』の成立はキリスト教徒がアラブ人によってラクダの用いられるのを始めて見た1086年のザラカの戦いより以前ではあり得ないとし、また、『ロラン』にサン・ジャック・コンポステッラへの言及のない理由を1095年の和解に至るまでの、同巡礼地とローマ教会の不和によるものとして、和解以前に『ロラン』が成立したと主張している。

Cf. *Les Chansons de Geste Françaises* (Martin de Riquer, traduction française d'I Cluzel, A.-G. Nizet, Paris, 1957)
Structural Arithmatic Metaphor in the Oxford Roland. (E.Webster Blatkin, Ohio state univ. press, 1972)

14) 『封建社会』（マルク・ブロック著、新村猛他訳、みすず書房、1977）

の第一巻 10-57頁、第二巻 125-137頁を参照)

15) Paul Zumthor, op.cit. pp.34-35

16) Cf. *La Chanson de Geste — Essai sur l'art poétique des jongleurs* (Jean Rychner, Droz et Giard, Genève-Lille, ＼1955, pp.154-158)

17) Cf. F. Cook, op.cit. pp.182-184

18) P. Le gentil op.cit. p.148

19) Cf. G. Brault, op.cit. p.6, pp.8-9, pp.111-115 [この点に関して、ペンサムの研究は極めて興味深いものがある(Cf. op.cit. pp.15-73)]

20) ズムトールは、先に述べた受容理論の傾向を持つ(とはいえ、それ以上に自由であることは明らかであるが)ロラン・バルト、ハンス・ロベルト・ヤウスの影響を大きく受けつつ、「読み手」の現代性が中世のテクストの「読み」に影響を与えざるを得ないことを述べている。このことは言語の不透明性とあいまってその著作の最後には以下のような文章をズムトールに書かせている。

「何をなそうとも、決して何も所有することはできない。そのことは良く分かっている。残っているのは、紙の上の記号を辿るという取るに足らぬ自由。例え取るに足らぬにせよ、我が家の窓の下の楓のむき出しの小枝から枝に至る輪郭は、その網に冬の空の全てを捉えたふうを装うが、あり得ないことであろうか? 恐らくは本当にそれを捉えたということが。」(P. Zumthor, op.cit. p.103)

21) P. Zumthor, op.cit. p.83

同様の言葉をミッシェル・フーコーの『知の考古学』にも見出すことができる。

「一体、所謂医学、文法、経済学とは何であるのか。それらは、それによって現代の諸学が自身の過去について幻想を抱くようなレトロスペクティヴな再編成以外のなにものでもないのではないか。」 /1969, p.45)
(Michel Foucault, *L'Archéologie du Savoir*, (Gallimard,

更に、本文中第一章で引用したバフチーンとズムトールの言葉に、今一つの共通項を見出すとすれば、それは、両者が共に「文学」を一つの歴史的産物、即ちある時代に生みだされた相対的な枠組みに過ぎないと見做していることである。

22) 例えば、ル・ジャンティは結論の章で以下のように述べている。

「結局の所、これまで以上に声高に宣言できることは、オックスフォード本『ロラン』の《優秀性<précellence>》である。」(op.cit. p.181)

23) この文脈においてズムトールの以下の文章は理解されるべきである。

「恐らくは私は倫理(エチカ)と言うべきであろう。それは知ること、欲すること、できること、することの相互的で、あからさまな何らかの関係についてのエチカである。決定的に定義され得ず、ましてや固定もされ得ないような関係である。というのも、ユマニストの道徳は、十六世紀の経済構造と同様に、我々の世界にとって縁遠いものとなってしまったからである。」(P. Zumthor,op. cit. p. 26)

24)　最後に、ズムトールの不当なオプティミスムについても言及しておかねばならない。それは歴史に関してはあれ程鋭敏にその問題性を指摘しつつも、師と仰ぐリシュネやビダルと同様、武勲詩の起源については伝承主義への強い支持を辞さない点である。武勲詩の起源問題自体が解決不可能の域にあることにズムトールが理解を示さないことは極めて残念であると言わねばならない。その点で、彼もリシュネと同様に中世のテクストの「他者性」をその伝承詩的本質の問題に還元してしまう危険を抱えている。

なお、1960年に仏語訳の刊行されたビダルの『「ロランの歌」とフランク人の叙事詩伝承について』への、1972年発行の『オックスフォード本「ロラン」の先史と原史』におけるエビシェの反論は、既に武勲詩の起源問題を『ロラン』の起源問題に限定してさえ、その解決が不可能であることを示している。しかも、相対立すると見える二人の主張は、実の所決定的な分岐点において、起源問題と美学的問題、就中本論で扱った一貫性の問題を混同している。これらのことについては、今春に発行された*JLLNF*(大阪市立大学森本ゼミ発行）に掲載の「武勲詩の起源問題に関する諸主張その２――Paul AebischerとMenéndez Pidalの主張をめぐって」で概説しているので、参照されたい。

Cf. R. M. Pidal, op.cit.; P. Aebischer, op.cit.

【参考文献一覧】

I　洋書：『ロランの歌』関連文献

Aebischer, Paul　*Préhistoire et Protohistoire du Roland d'Oxford* (Romanica, Berne, 1972)

Brault, Gerard J.　*The Song of Roland* (I/II) (Pensylvania State Univ. Press, London, 1978)

Blatkin, E.Webster　*Structural Arithmatic Metaphor in the Oxford Roland,* (Ohio state univ. press 1972)

Bédier, Joseph　*La Chanson de Roland* (Commentaires), (Piazza, Paris, 1927, nouveau tirage 1968)
La Chanson de Roland (Texte), (Piazza, Paris, 1921)

Cook, Francis　*The Sense of the Song of Roland* (Cornell univ. press, Ithaka and London, 1987)

de Riquer, Martín　*Les Chansons de Geste Françaises* (traduction française d'I Cluzel, A.-G. Nizet, Paris, 1957)

Gautier, Léon　*La Chanson de Roland* (Alfred Mame et Fils, Tours, 1872)

Gougenheim,Georges　*Orgueil et fierté dans la Chanson de Roland (Mélange de langue et de littérature du moyen âge et de la Renaissance,* Droz, Genève, 1970)

Jenkins, Atkinson　*La Chanson de Roland* (Heath's modern language series, Boston, 1924)

Le Gentil, Pierre　*La Chanson de Roland《Connaissance des lettres》* (Hatier, Paris, 2e éd. 1967)
Moignet, Gérard　*Pour Connaître La Chanson de Roland* (Bordas, Paris, 1985)
Mortier, Raoul　*Les Textes de la Chanson de Roland -- La version d'Oxford,* (Paris, 1940)
Pei, Mario　*French Precursors of the Chanson de Roland* (AMS press, New York, 1966)
Pensom, Roger　*Literary Technique in the Chanson de Roland* (Droz S.A. Genève, 1982)
Picot, Guillaume　*La Chanson de Roland* tome I/II (Classique Larousse, Paris, 1972)
Pidal, Ramón M.　*La Chanson de Roland et la Tradition Epique des Francs* (traduction française d'I Cluzel, A. et Picard, Paris, 1960)
Rychner, Jean　*La Chanson de Geste — Essai sur l'art poétique des jongleurs* (Droz et Giard, Genève-Lille,1955)
Segre, Cesar　*La Chanson de Roland* (tome I,II)(Droz, Genève,

II　洋書：その他

Bakhtin, Mikhail　*Rabelais and His World* (translated by Hélène Iswolsky, Indiana University Press, Bloomington, 1984)
Barthes, Roland　*Introduction à l'Analyse Structurale des Récits* (*Poétique du Récit* [Seuil,1977])
Le Discours de l'Histoire(*Poétique* N°49)
Castex, P.-G.　*Manuel des Etudes Littéraires Françaises* XVIe siècle, Moyen âge, (Hachette, 1967)
Foucault, Michel　*L'Archéologie du Savoir* (Gallimard, 1969)
Grimes, E.Margaret　*C'est le lay de Desirré,* (*The Lay of Desirré, Graelent and Melion,* [Slatkine reprints, Genèves,1976])
Roach E.　*Le Roman de Mélusine ou Histoire de Lusignan* (Coudrette, Klincksieck, Paris, 1982)
Rychner, Jean　*Les Lais de Marie de France,* (éd. par J. Rychner, Champion, Paris, 1982)
Le Gentil, Pierre　*La Littérature Francaise du Moyen Age* (Armand Colin, Paris, 1982)
De Lage, G.Raynaud　*Manuel Pratique d'Ancien Français,* (A.& G. Piacard & Cie, Paris, 1964)
Perrier, J.-L.　*Le Charroi de Nîmes,* (Champion,1982)
Zumthor, Paul　*Parler de Moyen Age* (Minuit, Paris, 1980)

III　翻訳書、和書

Auerbach, Erich　『ミメーシス』（篠田一士・他訳、筑摩叢書、1967）
Bakhtin, Mikhail　『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』（川端香男里訳、せりか書房、1988）
Bellement-Noël, J.　『精神分析と文学』（石木隆治訳、白水社、1990）

Bloch, Marc　『封建社会（全二巻）』（新村猛、神沢栄三、森岡敬一郎、大橋順雄訳、みすず書房、1973）
Bourin, Jeanne　『愛と歌の中世』（小佐井伸二訳、白水社、1989）
Гуревич, А. Я　『歴史学の革新――アナール学派との対話――』（栗生沢猛夫、吉田俊則訳、平凡社、1990）
Huizinga, Johan　『中世の秋』（堀越孝一訳、中央公論社、1979）
Eagleton, Terry　『文学とは何か――現代批評理論への招待――』（大橋洋一訳、岩波書店、1985）
Foucault, Michel　『知の考古学』（中村雄二郎訳、河出書房新社、1981）
『性の歴史Ⅰ　知への意志』『同Ⅱ　快楽の活用』『同Ⅲ　自己への配慮』（新潮社、渡辺守章訳、1976、田村俶訳、1984、1984）
Стеблин-Каменский　『サガのこころ　――中世北欧の世界へ――』（菅原邦城訳、平凡社、1990）
Morrisson, Cécile　『十字軍の研究』（橋口倫介訳、クセジュ、1971）
Rougemont, Denis de　「愛　元型としてのトリスタンとイズー」（平凡社　ヒストリー・オブ・イディアズ21　笠原順路他訳、1987）
阿部謹也　『中世の星の下で』（ちくま文庫、1986）
井上幸治　『フランス史』（山川出版社、世界各国史２、1968）
内田隆三　『ミッシェル・フーコー』（講談社現代新書、1990）
貝塚茂樹他　『中世ヨーロッパ』（中公文庫、世界の歴史３、1951）
神沢栄三　「《口承詩（オーラル・ポエトリー）》理論と武勲詩研究」（名古屋大学文学部研究論集）
柄谷行人　『日本近代文学の起源』（講談社文芸文庫、1988）
『探究Ⅰ、Ⅱ』（講談社、1986、1989）
木村尚三郎他　『概説フランス史』（有斐閣、1981）
桑田禮彰他　『ミッシェル・フーコー、権力・歴史・知』（新評論、桑田禮彰・福井憲彦・山本哲士編集、1984）
佐藤輝夫　『ローランの歌と平家物語』前後編（中央公論社、1973）
清水孝純　『祝祭空間の想像力』（講談社学術文庫、1990）
高津春繁　『ホメーロスの英雄叙事詩』（岩波新書、1966）
竹岡敬温　『「アナール」学派と社会史』（同文館、1990）
新倉俊一　『ヨーロッパ中世人の世界』（筑摩書房、1983）
橋口倫介　『十字軍』（岩波新書、1974）
『十字軍』（教育社歴史新書、1980）　1987）
堀越孝一　『騎士道の夢、死の日常　中世の秋を読む』（人文書院
松原秀一　「研究ノート　ジョゼフ・ベディエの校訂法再論」（慶應義塾大学言語文学研究所紀要、第20号、1988）
宮城音弥　『精神分析入門』（岩波新書、1959）
森島恒雄　『魔女狩り』（岩波新書、1970）　/(原書房、1988）
守義信　『西欧中世軍制史論　封建制成立期の軍制と国制』